



企画展「本多静六を支えた妻銚子と養父晋」解説シート

本多 銚子 (1864～1921)

■幼少の頃より才媛の誉れ高く、英語に堪能

本多静六の妻である銚子(「せん」とも言う。)は、元治元年(1864)1月11日に父敏三郎(後の晋)と母梅子(「むめ」とも言う。)の長女として生まれました。銚子は父晋の自慢の娘で、明治5年(1872)に日本で初めて開設した官立の東京女学校に入学し、書も当時有名な書家佐瀬得所の教えを受けるなど才媛でした。銚子は伯母の出口せい(晋の姉)に可愛がられ、その影響でキリスト教を信仰することになります。伯母を介してアメリカ人宣教師メアリー・ツルー夫人のもとで英語を学び、14才の頃には外交官河瀬真孝子爵夫人のために通訳をつとめたといひます。

■日本で4人目の公認女医

銚子は、明治14年(1881)、17才のときに後の海軍軍医総監高木兼寛の発意で開設した成医会講習所に入学しました。高木が日本の女子に近代医学を修得する能力があるかどうかを試すため、東京女学校出身の松浦里子と銚子を抜擢したからです。当時女性が医者になることは困難でしたが、銚子は熱心に勉強し、明治21年(1888)試験に合格し、日本で4人目の公認女医となりました。明治22年(1889)に静六と結婚。翌23年静六がドイツに私費留学すると、東京芝区新堀町(現在の港区芝二・三丁目)の自宅に診療所を開業しました。銚子の評判はすこぶる良く、患者は門前列をなしたといひます。明治26年(1893)静六の帰国後は、東京駒場の農科大学内の官舎に移りましたが、医業を捨てることができず、赤坂新坂町(現在の港区赤坂八丁目)に新たに診療所を設け、毎日人力車で往復しました。しかし、子供も生まれ、また夫静六を支えるため、明治30年(1897)頃診療所を閉じました。

■夫静六を支え、家庭内を平和に保つジャン憲法を考案

熱心なキリスト教徒であった銚子は、同情心にあつく、困っている人には着物などを惜しげもなく与えました。本多家に集まる人たちは皆、銚子を信頼し、その言葉ならどんなことでも聞く風であったといひます。銚子は、夫静六に後顧の憂いなく研究活動に専念して欲しいと願い、子育てはもちろんのこと、家庭内の一切の庶事を引き受けました。しかも、毎夜子供を寝かしつけた後は、静六の助手として原稿の浄書や講義案の整理をし、さらには英文翻訳や手紙の代筆まで行いました。

また、家庭内を平和に保つため、ジャン憲法を考案しました。これは夫婦間もしくは家族たちのあいだで、何か意見の一致をみないことがあると、お互いに二度までは意見を主張し合うが、それでも決まらない場合、三度目はいつでもジャンケンで決めるというもの。おかげで家庭内はいつも笑顔が絶えなかったといひます。



本多家記念写真 明治34年(1901)頃
(後列左端が銚子、後列右端が静六)

■早すぎる死

銚子は静六をよく支え、妻たるものは夫のためにつとめ尽くして倒れるもまた本懐だとの確信をもっていたようです。静六が林学博士として大成し、しかも四分の一天引き貯金を実行して財産を築くことが出来たのも、銚子なくしては不可能であったことでしょう。銚子は不幸にも43才頃から慢性腎臓病を患い全快不能となりましたが、その後14年間生を全うし、大正10年(1921)12月25日に脳溢血を発して57才で亡くなりました。銚子を失った静六の悲しみは深く、彼女の存在なしには、今日の私はありえなかったかも知れないと後に語っています。

本多 晋 (1845~1921)

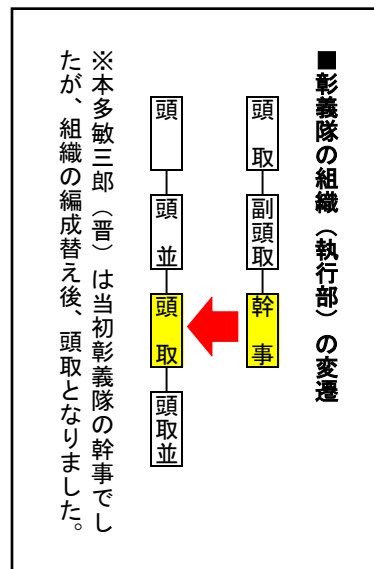
■一橋家譜代の臣本多家を継ぐ

本多静六の養父である晋^{すすむ}（改名前は敏三郎）は、弘化2年（1845）2月21日多賀家に生まれ、その後一橋家家臣の本多家を継ぎました。元治元年（1864）7月の禁門の変（長州藩の尊王攘夷派が朝廷を冒そうとした事件）では、一橋慶喜^{よしのぶ}に従って朝廷警護の任にあたり、その功績により朝廷から褒賞を賜っています。慶応2年（1866）慶喜が15代将軍になると、そのまま幕府に仕え、陸軍付調役並（陸軍奉行配下の役職）となりました。

■彰義隊を組織

慶応4年（1868）正月、鳥羽・伏見の戦で徳川幕府が朝敵となると、同年2月慶喜の名誉回復のために彰義隊を組織しました。本多は彰義隊の幹部（当初は幹事、のち頭取となる）として対外折衝を担当しますが、2月27日、落馬事故で足を骨折してしまい、隊から離れることを余儀無くされます。

彰義隊は、江戸城開城後も上野の寛永寺に立て籠もって徹底抗戦する構えでしたが、同年5月15日の上野戦争で大村益次郎が指揮する官軍に鎮圧されてしまいます。この時本多は、前日に知った官軍総攻撃の情報を何とか上野山の同志に知らせようと努力しますが、官軍に阻まれて果たせず、参戦すら出来ませんでした。本多は同志を殺してしまった苦悩と後ろめたさを生涯胸に秘めて生き続けました。



■明治以降のあゆみ

上野での敗戦後、本多は名を晋と改め、しばらく静岡で隠遁生活を送りました。その後、渋沢栄一の推薦を受けて、明治3年（1870）7月に民部省に出仕、次いで大蔵省に入ります。同5年（1872）2月、大蔵少輔吉田清成に随行してアメリカ合衆国からヨーロッパに渡航し、翌6年帰国しました。明治13年（1880）退官して横浜正金銀行の役員となり、同21年（1888）まで勤め、退職後は彰義隊の往時を思い、上野東照宮に奉仕する生活を送りました。

■本多晋と静六

明治22年（1889）一人娘銚子のために、東京農科大学の主席であった折原静六を婿養子に迎えようと縁談を進めました。静六が出した「卒業後、ドイツに4年間留学させる」という条件も、財産のゆるす限り何年でも洋行を引き受けましょうと快諾し、また銚子の優秀さに静六が気づいたこともあって、無事結婚に至りました。しかし、静六のドイツ留学中の洋行費として用意した金四千円を、預けておいた銀行家の破産で失ってしまい、送金できなくなるという憂き目も見ました。

■慷慨の士・本多晋

晋は、号を可斎と称し、禅を修め歌道を研究し、世事に遠ざかろうとしました。しかし、国を憂い思う気持ちは時に抑えることができず、明治38年（1905）日露戦争の講和条約に対して、これを屈辱的として反対の声を上げました。大正10年（1921）9月胃癌がわかり、同年12月26日に亡くなりました。享年76才でした。



晩年の本多晋翁

■資料紹介

資料一 明治六年十二月 新聞雜誌一七五〔新聞集成明治編年史〕

皇后宮女学校に臨御

優等生の名譽

去月二十九日皇后宮開成学校工行啓、次ニ女学校へ臨駕在ラセラレ、其節文部省長官左ノ祝辞ヲ奉呈ス。

○女子ノ教育ニ於ケル最モ忽セニスベカラズ、是レ此校ノ起ル所以ナリ。今皇后宮ノ臨駕ヲ辱フス、則チ将来女教隆盛ノ兆ヲ茲ニ証スルナリ恭ク祝詞ヲ述ブ。

○同日皇后宮御前ニ於テ、女学校上等ノ分信田喜久、青木コト、三橋シホ、軍田恭仁、本多セン、下等ノ分小林鋭、日下部真千尾、杉陽、板倉種、坂本甲子、中村専、間島幸、中村文、渋沢ウタ、細野コンノ数名へ御賞誉トシテ、書籍ヲ下賜ハリタリト。

資料二 明治二十五年十月十五日 毎日新聞〔新聞集成明治編年史〕

女医本多せん子

夫は農科大学教授

芝区新堀町に是迄開業し居たる女医本多せん子は先頃其良人本多ドクトルが独逸国より帰朝し、農科大学の教授に任せしより、共に同学校の官舎に引移り、去り難き依頼の外は診察せざりしが、今度赤坂区新町三丁目四番地に出張所を設け広く治療するよし。聞く同女医は日本女医師の率先者にして、明治十四年より成医学会の学生となり、高木、實吉両国手に就き慈恵病院にて解剖其他の实地研究をなし、終に医学全科を卒業し、尋で同病院の助手をなし、最も婦人病(子宮病)小兒科に妙を得たりと。又其薬価は上中下の三等に分ち、患者の分限により随意に納めしめ、往診は遠近に係らず車代を受けず、且貧困者には博く施療なすよし。

資料三 明治二十九年四月九日 報知新聞〔新聞集成明治編年史〕

女医の現況

目下女医のある地方は重に東京、大阪、神戸、長崎等にて川越、仙台、若松、宇都宮等にも営業し居るものあり未だ男医を圧するほどの勢力なけれども、普通田舎の藪先生よりは多額の収入あり、殊に女子は小チンマリとしてゐる特性あり、其交際も男医の如く広からざれば、優に門戸を張りて独立の生活をなし得るのみならず、医者の良人を持ちたる人は夫婦共稼ぎにてなかなかの好都合なりと云ふ、今東京に在る有名なる女医を挙ぐれば、

日本橋 高橋みつ。京橋 吉田けん。赤坂 大村のぶ。

京橋 岡見けい。本郷 伴はる。本郷 馬宮八重。本郷 鷺山弥生。等にて其他東京病院の助手田島かん子、丸茂病院の助手丸茂むね子、常宮殿下の侍医たりし本田せん子の如きものあり、田島、丸茂の両女は今尚ほ盛んに従事し居れども、本田せん子は某山林学士に嫁し妊娠して御殿を下りたる後は其の業を廢したりと云ふ。

資料四 女医本多銚子の思出(本多家文書四一六)

(表紙)

「

女医本多銚子の思出

弁護士法学士 本多 博

女医本多銚子ノ母出

弁護士・法学士 本多 博

私ノ亡キ慈母本多銚子ハ我国ニ於ケル第三人目ノ女医(第一ハ萩野吟子第二ハ……)デアル所カラ女医祭ヲ行フニ際シ、ソノ伝記ヲ書ケトノ命ニ随ヒ覚束ナイ記憶ヲ辿リテ其概要ヲ記シマス。母ハ慶応ノ前年僅カ一年シカ無カツタ元治元年本多晋ノ一人娘トシテ江戸ニ生レ、其母ハ江川太郎左衛門ノ江戸詰家老兩宮仲平ノ長女梅子デアッタ、父ノ晋ハ明治維新ノ際彰義隊頭取トシテ国事ニ奔走、家ニ在ルコトガ極メテ稀デアッタヲ為メ主トシテ母梅子ノ手デ養育セラレタ。十一歳ノ頃みす、つるゝすト云フ英人ノ家庭ニ預ケラレ英語ヲ学ビ、十五歳ノ頃ニハ早クモ英語ニ通達シ全權公使川瀬真孝子爵夫人(江川太郎左衛門ノ息女)等ノ為メニ

屢々外来客ノ通弁ヲ為セン由デアル又書ヲ當時有名ナル書家得所山人ノ門ニ学ビテ上達シタ、後竹橋女学校ニ入り成績拔群ニシテ憲昭皇太后御臨校ノ際等ニハ英文読書ト日本字ノ御前揮毫ヲ務メ其度毎ニ賜ハリタル辞書其他ノ御下贈品ハ今尚我家ノ家宝トシテ保存シテアリマス。

其頃女医養成ノ議起リテ女医問題頻リ二世ニ論議セラレタ為メ時ノ海軍医監高木兼寛博士ハ、果シテ日本ノ女子ニ新進ノ学問タル医学ヲ修得シ得ル能力アルヤ否ヤヲ試験スル意味デ、当時女子教育デハ最高ト称セラレタ竹橋女学校ノ学生中ヨリ二人ノ才媛ヲ選抜シテ、ソレヲ海軍々医学校ニ入レ、全ク男生ト同様ニ勉学セシメタ。其二人ノ内一人ハ母銓子デアリ他ハ松浦：女史デアッタ。

松浦女子ハ中途病氣ノ為メニ退学シタガ后ニ慈恵病院ノ看護婦長トシテ長ク勤務セラレタ由デアル。母銓子ハ遂ニ只一人限リノ女医学生トナリ、多数ノ軍医候補生ノ間ニ伍シテ勉強シタガ、ソレガ如何ニ困難デアリ、如何ニ不便デアッタカハ老後屢々自ラ語ラレタ所デアル。ソノ堅忍不拔ノ努力ニ対シテハ只ニ頭ガ下ル許リデアリマス。

コ、ニ只銓子ノ伯母デアッタ出口たか子ハ当時くりすと教ノ伝導使デアリ男勝リノ女丈夫デ、常々本多家ニ出入リシ、銓子ヲ熱愛シテソノ指導ト監督ニ努メラレタ事ハ銓子ノ修学上ニ与リテ大功ガアッタト云ハレマス。

兎ニ角長ク苦学ノ后明治二十一年二十五歳ニテ医術開業試験後期試験ニ及第シ我國ニ於ケル第三番目ノ女医トナッタノデアル。其翌年婿養子トシテ林学士静六ヲ迎ヘテ家庭生活ニ入ッタガ母ハ其年ヨリ芝区芝園橋外ノ自宅ニ医業ヲ開業シ翌二十三年静六ガ独逸留学後ハ一層業ニ励ミ傍ラ慈恵病院ニ婦人科ノ診察ヲ手伝ヒ或ハ横浜ふえりす女学校ニ衛生学ヲ講ジ或ハ慈恵病院ノ看護婦養成所ノ講義ヲ受持ツ等可也忙シイ働キヲ為シタ。二十五年静六帰朝後ハ駒場農科大学ノ官舎ニ移リ、赤坂新坂町ニ診療所ヲ設ケ駒場ヨリ人力車ニテ毎日出動スルコトニナッタ。

然ルニ母ニハ三人ノ子供モ出来其教養上下極メテ活動的ナ父ヲ内助スル必要トニ迫ラレ、涙ヲ吞ンデ他日子供ノ成人ヲ待ツテ再ビ開業スル迄一時開業医ヲ止メルコトニ決シタ時ハ明治三十年頃ト思ハレマス。其後

ハ親類ヤ知人ノ医療ニ当ル外ハ専ラ主婦トシテ家庭ノ仕事ニ当ルコトニナッタ。

結婚当時ヨリ主婦トシテノ母ノ生涯ハ父ガ母ノ百ケ日目ニ大西洋上デ記セル一文ニ詳ラカナレバ、ソレヲ其儘添ヘル事ニシテ筆ヲ擱キマスガ只私共母ノ子トシテ一言書キ足シテ置キタキハ、母ハ真ニ日本婦人ノ典型デ親類縁者ハ勿論、母ニ接シタ如何ナル人カラモ等シク温良才賢コキ婦人ト賞賛サレタ真ニ難有イ慈母デアッタト云フコトデアリマス。

資料五 『随縁詞藻』(大正十一年刊) 抜粹

婿静六が独乙国ミューンヘン大学に於てドクトルの学位授与式の時
大学長より五百人の来賓におのが名をも披露ありしと承はりて

やしないひの親の名さへも海の外に揚げて嬉しき山ほととぎす

静六が始めて叙位せられしを嬉しみて

分けそむる今日をはじめに位やまいよいよ高くのぼりませ君

辞世

かはりぬる世に兎も角もながらへて思ひ出おほきよみの旅哉

■展示資料

〈銓子関係〉昭憲皇太后より賜った英語辞書、往診鞆、医療用器具、医療用計量器、「看護婦解剖講義録」(明治二十三年頃)、青山教会会費領収証(大正十年)、東京女子医学専門学校奨学資金寄附願・仮証(大正十年)、大西洋上亡き妻の百ケ日にあひて(複写、大正十年)、女医本多銓子の思出(昭和十一年)、本多銓子肖像写真(昭和五年)

〈晋関係〉「喘余吟録」、彰義隊戦死者名書上、彰義隊遭難者碑拓本(大正十年)、米国派遣随行辞令(明治五年)、姑息ナル講和ヲ排斥スル請願書(明治三十八年)、本多晋社会上死去の広告(明治三十八年)、「随縁詞藻 短歌」、「随縁詞藻 長歌」、「随縁詞藻 大正十年」、「随縁詞藻 十一年」、縁側で和歌を嗜む本多晋翁(写真)

(平成二十七年十一月十六日、久喜市教育委員会文化財保護課発行)